

# ちば・谷津田フォーラム

# 里やまの自然誌



## 目次

斉藤正一郎先生を偲んで

ちば・谷津田フォーラム代表（千葉県立中央博物館生態・環境研究部長）中村 俊彦 ..... 1

ちば・谷津田フォーラム第6回シンポジウム

「谷津田再生 - 行政・市民の役割と課題」報告2 <パネルディスカッション編> ..... 2

2002年度活動実績 ..... 12

谷津田ファイル ..... 13

事務局より ..... 15

# 齊藤正一郎先生を偲んで

ちば・谷津田フォーラム代表（千葉県立中央博物館生態・環境研究部長）中村 俊彦

昨年（2002年）12月17日、齊藤正一郎先生が、肺炎のため76歳で亡くなりました。先生には、ちば・谷津田フォーラムの設立のときから幹事として運営にお力を頂き、また日頃たくさんのお話を教えていただきましたが、その突然の御逝去は、あまりにも悲しい出来事でした。谷津田フォーラム会員名簿の先生の自己紹介欄には「谷地の存亡調査・谷津田の重要性について話をする」と書かれています。まさに、谷津田を調べ、その重要さに気付かれ、そしてこれを守るため多くの人に情報発信する、いまやと私たちが取り組みだした活動を何年も前から一人で展開されたのが齊藤先生でした。地道な調査に裏付けられた先生の論理とともに、常にひるむことのない自然を守る情熱に、私たちは、多くを学ばせて頂きました。



歓談のひとつ（1998.12.25）

先生は1927年（昭和2年）1月1日に東京の亀戸でお生まれになり、小学校の頃に戦災に遭われ、その後は千葉に住まわれるようになったそうです。東京高等師範を御卒業後、現在の千葉東高校を最初に千葉県と東京

都の高校で物理学の教鞭をとってこられました。先生の自然を見る鋭さ、そして自然・生命を思いやるやさしい眼差しとともに、御専門の物理学で培われた論理的また数値的解析は、多くの人々に自然のすばらしさ、そして大切さを的確に伝えて下さいました。



下大和田谷津田で自噴井を探る（2001.1.7）

先生が1985年から始められた「都川通信」は、2000年11月発行のNo.139号「やち・湧水・土水路」まで続けられました。長年の研究成果を、自らの通信で多くの人に伝えていく。そして御自分の研究を少しでも社会に発信し、役立てようとする情熱は、どんな高名な研究者もかなわない力強さでした。県立中央博物館では、千葉県歴史・民俗資料調査会（1989年）また千葉県自然誌資料調査会（1990-1997年）のメンバーとして、都川、鹿島川、村田川の水源と谷津の自然や文化についての調査をお願いし、また1991年からは5年間にわたって「谷津田の水源を歩く」という講座・観察会の講師も務めて頂きました。さらに、千葉市の野生動植物の生息状況及び生態系調査（1992-1995年）や県の村田川生物調査（1999-2001年）、都川生物調査（2001年から）のアドバイザー会議等で先生にはお世話になりながら、河川や谷津田の自然保護の活動を御一緒させて頂きました。谷津田・湧水についての研究により先生は、別記のようなたくさんの賞を受賞されています。またその成果は、県の

村田川河川改修事業の休止や千葉市の谷津田生き物の里事業の開始、また千葉県の「里山条例」の制定などにも影響していると思います。

これからも、先生が残して下さった谷津田や里やまに関する膨大な研究の成果とともにその保全に心血を注がれたあつい御意志を、私たちはしっかりと引き継がさせていただくことをお約束しつつ、先生の御冥福をお祈り申し上げます。

なお、原稿執筆にあたり奥様の齋藤直子様と中央博物館の白井豊さんに貴重な情報を頂き、また写真は田中正彦さんに提供して頂きました。皆様に感謝申し上げます。

## 「齊藤正一郎先生が受賞された主な賞」

1. 1973年 6月 日本原子力文化振興財団「人類とエネルギーその教育上の課題」優秀作。
2. 1975年 10月 毎日新聞社「あすのわが県を考える（印旛沼を考える）」準提言賞。
3. 1980年 11月 千葉市「千葉市の文化についての提言」特選。
4. 1981年 11月 千葉市「千葉市の文化についての提言」特別賞。
5. 1982年 2月 ものを大切に作る運動千葉県推進会議「省エネルギーについての私の提案」佳作。
6. 1982年 6月 千葉県水道週間の作文知事賞。
7. 1982年 6月 千葉県千葉県環境月間作文特選。
8. 1983年 6月 千葉県水道週間の作文知事賞。
9. 1986年 8月 毎日新聞社「あすのふるさとを考える61年度毎日郷土提言賞（新しい千葉市を考える・都川流域計画）」千葉県優秀賞。
10. 1990年 河川環境管理財団「わが町の水辺の未来の夢（私説都川勸進帳：千葉市に水と緑の回廊を）」政務次官賞。



## < パネルディスカッション編 >

前号に引き続き、2001年11月18日、千葉県立中央博物館1階講堂にて開催されたちば・谷津田フォーラムシンポジウム第6回シンポジウム「谷津田再生 - 行政・市民の役割と課題」の後半、パネルディスカッションの全記録を掲載いたします。

5人のパネラーの発表と参加者を交えたパネルディスカッションは、谷津田の現状と将来を考える上で大変有意義な内容でした。



### 司会（川本）

一人15分ずつパネラー各位が取り組んでこられたこと及びその基本に流れるお考えを中心に5つのテーマについて報告していただきました。これからパネラーとのフリートークということですが、今回のパネルディスカッション全体のテーマが「行政と市民の役割と課題」ということですので、最初に結論的なことをお話いただき、大上段に振りかぶったこととなりますが、21世紀これからの社会のあり方、そこに向けた市民と行政の役割や課題についてお話いただければと思います。

### 長谷川

私は生物多様性という観点から話をしましたが、その多様性を持った谷津田の自然をどう保全していくかということに対して、さまざまな社会的な問題が関係していますが、私は種の問題に絞って結論的なお話をします。

生物多様性といいますがそれを構成している種、さまざまな歴史性をもった種ですが、究極的には一種たりとも絶滅させてはならないという立場を堅持すべきだと思います。そのためにいろいろな手段をこうじることになりますが、たくさんのお金を投じて保護区をつくったり行政的な手当てをするというカン





フル剤的な形で自然保護区を維持するということがあります。それから、欧米ではエコツーリズムなどに資金を投入して自然を守るということもあります。そういうことでもあります。日本の谷津田のような自然は原生自然ではないということを見るとカンフル剤的な自然保護ではなくて、それは現状を一時的にきちんと把握することで必要なことであると思いますが、持続するというのであれば、一次産業ということ人間がそこで生きていくという原点に立ち戻った自然利用の中で、もともと日本の自然はその程度であれば絶滅することはないはずですが、そうした土地利用をする中で生き物を保全を達成していくことになるのが一番適していると思います。

岩田

先ほど言い残したことで、谷津田をどうするか、自然保護をどう考えるかということの続きを話します。

谷津田は人の手が加わらないと消えてしまうものです。一方、自然保護とは、人の手を加わらないで自分たちで生きて生けるようなもの、必ずしも人の手を全部排除するものではありませんが、自分たちで生きていくために妨げとなる人の手を排除すると判断しますと、谷津田の保全は自然保護とは必ずしも違う別のものではないかという言い方をしました。どうしてそれが問題になるかといいますと、人の手によって管理されているところは結局、人の価値判断で、これは谷津田特有の生物だから残そう、これはそうではないという人の目によって判断されます。それはそれぞれの段階の自然を見る人の目のレベルによってずいぶん違ってきます。自然保護というのは自然自身の手によってされるべきものという点では、谷津田の生物多様性の保護といっても人間の目を通してのものでしかないということが第一の問題です。

第2点は、谷津田の多様性の生物群がいつどのように生まれてきたかということ、谷津田ができるそれ以前の自然の中で生まれたものです。そうした生き物のかつてのふるさとが一方で破壊されながら他方で、うまい具合に目的は農業ですがある環境が保持されて、そこで自分たちの生活環境が奪われた生き物がそこに集まってきて一つの多様性ができている訳ですね。そういうふうな生き物の歴史を見ていく中で谷津田の生物をどうみていくかということを考える必要があります。そうすると、谷津田が消えると貴重な生物がなくなってしまうという意味で自然保護につながる、自然保護そのものではありませんがとりあえず緊急な危機状況を切り抜けるという意味で重要な意味があります。これは、もっぱら自然保護の立場でいっていますが、だからといって伝統的な農法や人の生き方や農村の自然環境は駄目だとはいいません。

最後の結論になりますが、谷津田を保護すると同時に、かつての生き物の故郷を復元することを一方で考える必要があるのではないかと、それが今放棄された谷津田のなかにあるかもしれない、それが谷津田の再生とは別に、そこに住む生き物たちのふるさとをもう一度回復するという視点で、今放置された谷津田を再生することが必要ではないかと思います。そこにむけての谷津田の自然環境の保全を考えていくことが必要ではと思います。

最後になりますが、里山が管理されなくなってできた放置林は荒廃という言葉で言われているが、現在これらの放置林は植生の遷移に伴い自然林に向けて姿を変えつつあります。これが100年もたつと自然林に近いものになるとおもわれます。人間の立場から荒廃していると思われるかもかもしれませんが、思い切って発想を転換し、このまま放置するなり、あるいは植物遷移の進行を早めるなどして自然林を回復するという見方も可能ではないかと思います。

かつての農業の時代の自然環境には里の中に里山があるとともに、その裏に奥山があり、その上には岳という空間がありました。ほとんど人の手がくわわらない場所です。そういうところに自然環境が保持されていました。ですから、里山や谷津田を里の中でくくらないで、かつてあった奥山や岳とセットとして考えていきますと、私たちは里だけ考えないでそういう自然のままの林を回復させることを視野の中に入れていかなければならないと考えます。



## 熱田

農業の立場から言えば、荒れた田んぼや畑は、本来いまの日本の人口を養うためにはそれらに手を加えても不足すると思います。というのは日本の今の食生活を維持するためには、すべての農地を利用しては足りない、2倍以上の面積が必要だと思います。それであれば谷津田や棚田も耕さねばならないと思います。今多くの食糧を外国の土地でつくってくれている、それで皆の生活が成り立つ、こういう余裕は世界全体で見るとありません。私も機会があって諸外国を見てきましたが、各国は必死にやっています。日本が何でこんな贅沢なことがやれるかというのは、日本は経済の金のお力で買っているからなのです。でもそれは、農家の責任ではありません。都市の人がいかに気づくか、これをどう考えるかという問題です。私もそのために今日もここに足を運んできたのですが、それを気付いて欲しいのです。私は消費者の人に田んぼや畑に来てもらうことを最初からやってきました。来てはじめて大切なことに気づくのです。やはり現場にきてほしいのです。それから、有機農産物の認定制度ができて中国がWTOに加盟すると中国から大量に入ってきます。日本のメーカーがすでに向こうにいて準備しているのです。日本の基準にあった農産物をつくりはじめて生産をはじめています。ですから日本の有機農産物がこれにつぶされます。日本と中国で競争すると勝てないのです。今まで有機農業をやってきた人がつぶされます。壊滅的な状態になります。消費者の人は本当に真剣に考えないとたべものがなくなってしまう恐れがあります。

その中に遺伝子組み換えの問題もあります。また、種がほとんど国産のものがなくなり、アメリカ、オーストラリア、オランダ産ばかりで、種がなくなることは自分たちの首を抑えられることです。知らないうちに大変な事態になっています。

今ある農地をどう保全し、自分が食べる農地はどこかを考えることが大切です。

私のところは田植え前に消費者の方と1年間の予約を面積でしている。100キロたべたい人は200平方メートルを予約してもらいそこでとれたものは全部引き取ることにしています。うちの面積が全部うまれば減反の要請にはこたえられません。今年も減反の要請がきましたが、そういう事情を話せば町もあきらめるようです。自分の食べ物について土地にはりついて考えれば、日本の土地は最後の人がいくところになると思います。それだけ、自分の食べ物がどこにあるかをかんがえて欲しいと思います。

## 渡辺

食料の自給率については非常に関心が高いものがあります。私のところのオーナーの方もそういう意識が非常に強いのです。今の熱田さんの話ではないですが今後の日本の農業を守っていけるのは農産物をつくるという現場を消費者に知ってもらうことが大切だと思います。そこでまずできることということで、都会のひとたちは谷津田であるとか自然を残していこうとする、しかし、谷津田の保全を都会の人が思っても、田舎の人がそう思わないと保全できません。そこで田舎の人がどういう状況になればそういう気持ちになるのかということですが、それができないのは経済的なものがあると思います。田舎の人も続けることができれば続けたいという気持ちがあると思います。そういう都会、田舎の思いをつなげるのが行政の役割だと思います。今回のオーナー制度は、首都圏ということで維持保全ということに対する都会の人の意識が非常に高いと思います。それを地元農家の方がどれだけ受け止められるかということで今回のオーナー制度を進めてきたのですが、経済的な面それと誇り的なものがあります。地域に対する誇り、都会の人がみにきて大山千枚田がきれいだといわれればうれしいわけですね。都会の方の財政的な支援と励みの言葉、それを地元がうまく受け入れられればある程度進んでいくと思います。オーナー制度をはじめたのが行政で、募集も行政、利用料の徴収も行政、地域にはそ





の8割を委託料として地域に渡しています。大山千枚田保存会はその8割で作業した人に賃金払いしています。今年は300万円の8割が作業者に分配され、地主に1割還元されています。農家は土方に行っていますが、そうであれば分配金で農作業に従事し続けることができると思います。

それとあわせて、平成12年度から農林水産省の補助金で、中山間地直接支払い制度ができ千平方メートルあたり2万1千円支払われますが、そういういろいろな制度を活用する中で、棚田における後継者をつくり、都市の方の将来的に田舎に住んでみたいという気持ちを受け入れていくということが進行していく中で保全もしていけるのではないかと考えています。

藤原

先ほど申しましたが、農林漁業第一次産業を復活させていかねばならないがそれには時間がかかります。それを待っているのは谷津田がなくなってしまうので、それまでに緊急避難的な対処として、行政の役割として谷津田に埋め立てをすることを規制していかねばならないと思います。できるだけ既存の県の条例の中で、谷津田を含めて森林を保全するような制度や規制をしていってもらいたいと思います。実は、東京都では多摩の谷津田が残土処分埋め立てでなくなってきているということで、昨年自然保護条例を改正して谷津田の保全のための残土処分規制を行ってきています。千葉でも市民とともに運動を進める必要があると思います。それからこれからますます問題になると思われるのが、かつての工場だった土地すなわち工場跡地が土壌や地下水など様々な有害物質で汚染されているのですが、そうした工場跡地の開発で出てくる有害物質で汚染された残土が千葉に捨てられる危険性があります。千葉に入ってくるところで差し止めることが必要です。残土は有害物質がなければ残土を有効利用していくということもありますが、私はもともと自然地形にはその土壌バクテリアを含めて自然植生や生態系があり、それをかさ上げしたり外からまったく違う土を持ってきて地形や土壌生態系を変えるような土地利用が許されていいのかということについて疑問に思っています。生態系保全といってもこんなことを言ってもまだまだ何をいっているのかという見方しかされない状況にあると思います。



たとえば、那珂川の水を霞ヶ浦をとおして利根川に流すという水利用の面からだけで生態系をまったく無視して国土交通省によりおこなわれていますが、その河川で定着してきた生態系をまったく変えてしまうことが平気で行われているということから残土による埋め立て開発もみていく必要もあるのではないかと考えています。生物の多様性とは何なのかということも市民も考えていかねばならないのではないかと考えています。

司会

ありがとうございました。5人の方にお話をいただきましたが、大体3点のことをお話いただいたともいます。ひとつ人間は自然環境の前で謙虚さをもつべきではないか、自然を保護するというよりは自然の自立を妨げないことが必要ではないか、そして谷津田については緊急避難的な措置なんだということですね、それとのからみで生物多様性とは何なのかということに戻ってきます。谷津田についても里の部分のみならず奥山、岳という範囲を広げて考えるということです。

二つ目は農業の問題です。都市と農業の間のネットワークが寸断されている状態にあります。そこで消費者市民がその実態を知ること、そして都市と農村の間で対話にもとづいた信頼関係をつくることです。三つ目はそうはいつでも緊急措置として産廃問題などについて法制化が必要ではないかということです。

続いて、パネラー相互のフリーな討論ということですが、私のほうからいくつかテーマを出したいと思います。

最初に、千葉の場合ですが、公害反対。未然防止運動と自然保護の団体と自然観察、まちづくりのグループが連携してとりくまれるのがマレだと感じますが、そこで市民の役割という面からみた場合、少し検討の余地があると思います。今回も谷津田の保全には関心があると思いますが、自然保護することに関してはいち歩進まないという面もあると思います。この点について岩田先生いかがでしょうか。

岩田

全国自然保護運動をみていると、ある特定な分野の自然保護の取り組みのネットワークはありますが、その一方で全国自然保護連合の活動は活発ではありません。問題別の専門的な人たちが集まるほうが当面の問題を解決するのに効率的な取り組みができます。そういう問題毎の集まりですと、全国自然保護連合というような団体の役割はなくなってくるのですね。

それと同じように、千葉県自然保護運動を考える場合に、たとえば藤原さんたちの残土産廃問題というところと全国とつながり各地域とつながります。野鳥関係でいうと日本野鳥の会や千葉県野鳥の会があって全国とつながりながら、いろいろな地域の自然保護活動とつながっています。

今一番欠けているものは何かというと、それぞれの地域の人たちが自分の暮らしを取り巻いている課題について、問題別ではなくて地域の生活と環境というものを丸ごと自分たちで考えて取り組んでいくという視点が必要なのではないかと思います。各地域ごとに丸ごと自分たちの地域のことを考えていくという組織ができていくことが大切です。

それからそれぞれの問題によって団体の考え方が違うことにも目を向ける必要があります。例えば、三番瀬の埋めて反対では共通するが、具体的にどうするかということとそれぞれの団体によって違いがあります。その違いを認めながら共通しているところでどういうふうに行っていくかということ、もう少し垣根をとおぼろげに考えていくようなことをしなければならぬ、千葉では自然保護連合はそういうことをやっていたかねばならないと考えています。大事なことは実際に顔をつきあわせている人たちのところでお互い同士つながりながら自分たちの問題を考えることがまず一歩で、それは千葉県全体だとか日本全体や世界全体でのつながりを考えながら単位をそこにおいて自然保護のあり方を考えていくことが必要だと思います。

司会

地域の多様かつ多面的な問題を丸ごと考えていく、その中で広範囲なネットワークが必要だということ、現場に足を運び対話することのも大切だということですね。

さて、生物多様性という観点からすると、農業の分野でも遺伝子組み換えなどをみていると農業のあり方そのものが生物多様性という観点から問われていると思いますが、熱田さんいかがでしょうか。

熱田

遺伝子組み換えの問題がありましたが、5年前に国連大学の研究者の発表会があって、そこで驚いたのは、虫の遺伝子をエダマメの茎の中に入れるのですが、スライドで見せられたときに、これは人間がしていいことかなーと思いました。研究者にとっては遺伝子組み換えの成功例というのでしょうか、そこまでなせる必要があるのか、質問のコーナーがあって前もって出しておくのですが、最後にまわされて、質問しはじめると時間がないということできられてしまったのです。海外では、遺伝子組み換えしたものが悪影響を与えるという事例がありますからそのことで質問をしようとしたんですが・・・。そうした研究者は狭い世界でやっているから畑や田んぼに行っていないのではないのでしょうか。そういうことをしなくても田んぼや畑の生産性はあげていくことができます。いろいろな作物をつくれれば土地を豊かに利用できます。そして、それに合わせてさまざまな生物がきます。生態系という点から話をすれば、モンシロチョウはとまったところに卵をうみますので農家にとっては恐怖なんです。ところがムラサキコマユバチがその青虫の体の中に卵を産みます。そうなれば青虫をわざわざ殺す必要はなくなるのです。しかし、そのためには青虫にとって天敵である蜂のすみかを確保しなければなりません。周囲で農薬をつかっていると蜂のすみかを確保することはできません。自然の生態系を有効に利用するためには地域全体で取り組む必要があるのです。

さて、害虫益虫は人間が決めたものです。雑草も現段階で人間が利用できないと思っているからそう呼んでいるだけで本当は益草かもしれないのです。人間の浅はかさもあります。生物多様性を人間が意識するためには、まず、そういう人間を育てる必要があります。学校の教育は役に立たないものが一杯あります。また農学栄えて農業衰退すると言われる。この世界を考えたとき、学問とは何かを考えます。農家の人は皆それなりの知恵や考えを持っています。田んぼや畑の現場に行き、そうした農家の人と接することが一番教育になるのではないかと思います。それとともにそうした農家の人に誇りを感じてもらうことも必要です。都会からきた子供が土をいじっているとその親が土を汚いと言うことがあります。ちょっとしたことから歯車がかかるのです。また、無農薬ですから野菜から虫がでます。虫を嫌っていたのでは、そうした農業はできません。生物があって皆生きていけるんだということが認められていくような社会になることを期

待しています。

司会

先ほどから都市との交流ということが言われていますが、鴨川では農村と都市との交流ということで相当注意をはらわれたのではと思いますが、どういう点に配慮されたのでしょうか

渡辺

都市と農村の交流は、いわゆる都会のニーズを受け入れていくそこからはじまると思っています。その際に、地域で生活する一人一人思いが違いますし、理解度も違います。そこである程度わかった時点で形にしていけないといけない、7割から8割の方が理解されれば建物も含めてつくっていいこうとしました。地域の方々との会議は何かを決めることではなくて、どちらかという意識啓蒙的なものが多いのです。同じことを繰り返し話しました。私は農林水産課の職員ですが、農業はしりません。どちらかという都会の人間です。一方、都会と農家の人との交流については、農家の方々は、都会の人が作業をやりたいんだということがなかなか理解しづらいのです。知らない作業を体験してみたい、そのために100平方メートル3万円の学費を払いたいというそういう都会の人たちの気持ちが農家の方にとってわからない面がありました。

もうひとつ、地元にしてみればどうして大山なのかということがあります。棚田はほかの地域にもあります。その点ではいまの場所の決定で苦労しました。しかし、やってみて成功すると皆さん理解していただけます。結果オーライという一面があります。

<会場との質疑・意見交換>

質問・生物多様性など学理的な分野から農政への発言の機会が多いのでしょうか？

長谷川

答えはイエスですが、それはほ場整備が進む一方で、生物がすまなくなったことからそれを問題と受け止めた農水省から意見を求められ、私の場合はカエルなどの生き物の立場にたってコメントしてきました。実際はそういう場に行く、理学農学の境目がなくなっていると感じます。両方とも、それぞれの分野では専門ですが、カエルのすむ田んぼはどうすればよいかということになると、素人に近くなります。そこで、農学理学を超えて、それぞれかかわった人が知恵を出し合うという状況が少しあるのが救いかなと思います。

質問・休耕田に水をはっておくと水棲生物が増えるのでしょうか。かつて、千葉市の東南部には80を超えするため池があった、今残っているのは公園の池を含めて20ほどとなり、トンボの数も少ないはずですが。水棲生物を増やすということから休耕田に水をはることはいかがでしょうか。

長谷川

これについてはイエスでありノーです。水をはれば水棲生物は一時的には増えますが、それらは多くの水棲生物、トンボやオタマジャクシですが、今まで何もなかった空白に水がたまってプランクトンができますが、そのまま放っておくと遷移がすすんでかえって貧困になる傾向もあります。水をはったあとのごく初期にのみ生きる生物もありますから、イエスでありノーだといったのです。ため池をつくっても、最後に水を干したり、冬には水を抜いたりというさまざまな状態をつくっていたわけで、その中でさまざまなシステムが可能となったのです。



質問・人手が加わると自然に悪いというが、これは人間を自然と区別しようとする人間の側のうぬぼれという一面もあるのではないかと、ほかの動物たちは自然林の中で生活しています。人間の側の共生の考えの欠落ではないのでしょうか。サルや鳥たちが入っても自然林だ、それでは人間が入ったら自然林ではないというが、人間も自然の一部ではないでしょう。



岩田

自然の定義は、昔は人の手の加わらないそのままのものを自然といいました。人の手の加わったものを人工的なものといいました。アリストテレスなどの自然の定義はそうでした。しかし、実際には人間の手の加わらない自然はどこにもありません。南極の雪原ですら影響を受けています。私たちの生活圏では自然のままの自然はありません。アリストテレス的な自然の定義は私たちの頭のなかだけで実態がなくなった定義です。

ところが、自然という言葉はあるわけです。農村の自然は自然のままの自然ではありません。そこにはカエルや稲も含めているんな生き物がすんでいます。こういうのはどうみるかというたとえば水田は人間がそこに働きかけて米を得るという社会的営みの場のことで社会的概念です。これを自然的概念でいうと湿原になります。畑も同様です。大根やサツマイモをつくる生産の場です。これを自然的概念で言えば半荒原になるわけです。一年の内の大半は植物がない場所です。

人間の意図とは関係なくそのものとして存在しているという面と、人間がそこに社会的な価値付けをしているという二つの面からとらえていくとよいと思います。人間がほかの生物と区別したところから、人間と自然という考え方からでています。そのものとして存在する面と人間が価値付けした部分と両面からみればどうかということでも考えたわけです。

私は農村の自然の変化を観察しているのですが、農業とまったく関係のなくなったものが農村にできています。放置された場所や住宅地などです。全体としては農村の自然環境といいながらそれとは関係ないものが混ざっています。今までそうしたものは農村の自然環境からの離脱地として排除してきたのですが、こうしたところが問題 ゴミ捨て場など - になっています。たとえば、午前中の発表でもあった船橋の坪井の自然をみますと、保存林とみる見方とともに、そこに住む人たちの生活環境としてみていくという見方がないと駄目です。そのものは自然としてどうあるのかという視点( )と、環境として人間の側からとらえた視点、そのうち生産活動の場として捉えた視点( )とそれ以外の身体的精神的健康の維持だとか子どもの教育の場だとかという一般的な生活環境の場( )として捉えた視点、この3つの点からとらえると農村の自然環境は具体的にみえてくると思います。生物多様性でみると の視点です。農業の谷津田は ですね。そうではなくて一般的な環境としてみるのは です。こうした見方で私たちのまわりの環境をみる必要があると思います。ご指摘の点については、賛成ではありますが、それだけでは単純にいけないのではないかと思います。

司会・キャベツのナメクジ対策は？

熱田

ナメクジが住みやすい条件があるので住むのですが、あまり発生すると被害が大きいのですが、私自身はナメクジの被害をあまり大きく体験したことがないのでよくわかりません。カエルが食べたりして繁殖しない条件があるのかもしれませんが。そうした天敵がすむ条件があるか人工的な対策が必要なのか、あるいはナメクジが歩きにくい状態にするとか、そのときそのときその場に合った対応ということになると思います。

司会・農家の方々にとって町の間が来ることで困るのはどんなことでしょうか

熱田

皆さんの家庭に20人くらいの人たちが来たときになにが困るかということを考えてください。家の中の生活の場をみられるのが嫌われます。農家というのは特に蔵、家の財産です見られるのを嫌います。ですから一般には援農は農家では嫌われるのです。農家の人も生活しているから必要外には普通は家庭の中を人に見せたくないのです。そういう点では難しいものがあります。自分の立場を置き換えてみるとわかりやすいと思います。

渡辺

私たちは都市と農村の交流ということでやっていますので、特に、困ることはありません。一時、ゴミが散らかったり空き缶があるということもありましたが、最近はそういうことがなくなりました。来られる方も意識が高くなったと思います。ただ、地域に移り住むようになってそれから問題なんでしょうね。都会から越してきた方は都会の論理で行動し、地域に溶けあうことが困難な場合もあるようです。観光で来る一

過性の方でほとんど困ることはありません。

質問・棚田を継続するためには若い人に関心を持ってもらう必要があります。なにか仕掛けがありますか。  
渡辺

私も50歳をすぎて、将来自分が役所をやめて何になろうかと思っています。一番興味のある年代が50代であり60代だと思います。仕方のない話です。しかし、若い方が興味を示さないかという棚田のオーナーの方にも大学生のグループがいくつかあります。作業日になると20から25人来ます。ただそういう人たちが一般人になったときに、自分の職を持ちながら、2時間から2時間半かかる田舎に興味を持ち続けるそれを求めるのは難しいと思っています。農業がこれから家族を養うのに展望のある職業かという現段階ではノーだと思っています。ただ、自然を守り大切にしたいと都市住民の多くの方が思っておられることを強く感じます。結論を言えば、若い人は現段階では仕方がないと思います。50~60代の方が田舎に越してくると、昔は国民健康保険税が高くなるといわれましたが、今は健康な方であれば地域で経済活動をしていただければ地域のプラスになります。行政の人間ですので、まちの人口が減るのは交付税ですとかまちの財政面でマイナスになりますので、やはり人口が多いというメリットがあります。私はそういった方たちが農地を守っていただく一人になっていくという夢をもっています。

質問・鴨川では、活動を進められる上でソフトの面、都市と地元のコミュニケーションにも大変力をいれられたと以前お話を伺いました。国の助成金を受ける例は全国沢山ありますがすべて成功している訳ではありません。千枚田のソフト面での成功の秘訣はなんだったのでしょうか。

渡辺

鴨川は年間300万人くらい観光客がきているとかつては言われていました。しかし、山の中では過疎化がすすんでいます。旧鴨川町はいろいろな産業もありますが、棚田のある旧長狭町は合併前は過疎指定を受けていました。その一方で、鴨川周辺の市町村で農業を核にしたまちづくりが盛んです。そうした中で農業を核に活性化したいという地域の方の思いがありました。

もうひとつ時代背景もあります。自然環境への関心の高まり、そして平成11年に農林水産大臣が日本の棚田百選を選定し、全国棚田連絡協議会が東京のデパートで催しを開催しました。そうした取り組みの中で、都市住民の間で、急速に棚田に関する関心が高まりました。平成11年5月にはNHKの「小さな旅」で大山千枚田を取り上げてくれたということもあります。

質問・放棄水田の今後のあり方として管理しないあるいは管理する両方あるのではないかと思います。

岩田

谷津田として守ることが一つ、管理しないでそのまま放置することも一つの方法です。もう一つあります。谷津田をつくる前に存在していた自然の谷津を回復できないだろうかというものです。かつての田んぼ以前の谷津は想像できるのではないかと思います。私は選択肢として3通りあると思います。

質問・行政の建前とは裏腹に谷津田が破壊されているときに自然保護団体や住民運動が行わなければならないのはどんなことでしょうか。

藤原

道路ダムさまざまな公共事業の見直しが行われていますが、なぜそこに手を加える必要があるのか、その見直しを行政に求めていくことです。国も政策評価法ができて公共事業の透明性や住民の合意手続きも含めて行おうというふうになってきています。環境アセス、総合アセス、代替アセスなどを行う方向にあり、市民も従来型の政策決定のあり方に異議を唱えていくことが大切だと思います。

質問・遺伝子組み換えや中国から輸入問題について具体的なアクションプランがあれば？

熱田

輸入の農産物、消費者は表示をはっきりしてもらい、違法ではなくきちんと表示させることです。スイスでは国民が何をかうかという国産からかう、まず自国のものを買うのです、自分の国のものをなければ海

外のもを買うのです。買うときに八百屋さんでも声をかけていくことが大切です。ごぼうでも成田で泥をつけて国産として入ってくるものもありますから八百屋さんもわからない面があります。国産かどうか消費者が聞いてみることです。もうひとつは、どんな植物でも空気中に微生物がいる。その微生物と一緒に食べている、輸入食べ物はその微生物も取り込んでいる。それで健康が大丈夫なのかということがあります。

<パネラーからのまとめの一言>

藤原

問題のたてかたとして自然保護、観察などの相互のネットワークができていないということを感じます。自然観察している方にきくと、千葉県内の残土処分場があるとか不法投棄の情報をたくさんもっておられるのです。そうした方と多様な取り組みを通してつながりをもっていきたいと思います。

渡辺

皆さん方が谷津田や棚田などを守っていこうということ、皆さん方が何が自分にできるかということをおかんがえて取り組んでいくことがまず大切だと思います。

熱田

根本的にはみな暮らしの問題です。世界の資源や食料を日本に集めてきてそれで苦しんでいる、その一方では世界には餓死寸前の人もたくさんいる。世界を平均にならしていったらこんな暮らしをしていてよいのか、こうした足元を見つめていかないと自分たちも苦しんでいくことになります。そこを見据えたうえで、いろいろな運動がおきないとだめだと思います。今の有機農業運動も有機の循環を考えたときに、ナタネなど有機物は輸入により多くありますが、有機は各土地には本来少ないものです。有機運動ではなく、パーマカルチャーという視点が大切だと思います。有機物をどう自分のところで循環させていくかが私のテーマだと思っています。

岩田

今日はあまり問題にならなかったのですが、子どもの生活と教育という面から農村の自然を見ていく必要があると思います。私が特にもうしあげたいのが都市の中で生活している子どもたちが日常的に都市の中で森林環境など自然環境に触れあえるように都市環境の中に自然環境を作り上げることが必要です。人と人との関係だけの教育は限界がありますから何もかもできませんが、自然環境の中で人間性を育てていくということに知恵を絞る必要があると思います。

長谷川

谷津田は社会化された自然という見方がありますが、そこにいる生き物は自然の生き物です。しかし、そこにいる生き物が何が何種類あるかということもわかっていない面もあります。生物の相互関係も知っていかなければなりません、人間が改変していったときに、どういう問題が発生するのかをきちんと指摘できるようにならねばならないと思います。

司会・3時間以上にわたって、行われましたシンポジウム、これにておわらせていただきます。最後に谷津田フォーラムの中村代表より本日のまとめと閉会あいさつを行います。

中村代表

自然の中に、人間を含めるかどうかという話がありました。紀元前の時代は自然と人間を欧米でも一体的な見方をしていたようです。それが、キリスト教ができ、神がいて人間がいて神が人間のために自然をつくったという思想が欧米で広まったようです。日本はどうかというと、自然そのものが神であり、その中で人間が生きてきたという思想できた面があります。明治以前には、今の自然という概念の言葉はほとんど使われていなかったようです。今、私たちが考えなければならない自然とは人間を含めた自然です。空気・土壌・海洋・陸・森林すべてと人間がいかにうまくやっていくかというときに自然保護という言葉が生きてくるのです。これは私の師匠である沼田眞先生がずっと言ってこられたことですが、私は、人間を含まない概念で自然という言葉を用いる時代は終わったといってよいと思います。

人間は自然界の一部として考えた場合、その機能的側面の生態系を知る必要があります。それはいろいろな生き物や物質が互いに関係し合い秩序立っていることで、先ほど害虫が大発生するということはかつての自然界ではあまりなかったはずで、害虫の大発生には益虫も殺してきた人間の自然に対するやりかたがあ



ります。人間が自然を100%支配する。全部人間のものにするというのは間違いです。日本人がバクチのような経済・競争社会に翻弄され、その中で自殺者が年間3万人以上もいるといます。金儲けのためだけではなく、具体的に自然と共にどう生きるかということを考えねばなりません。

次に、具体的な話について、谷津田を行政が担う場合、今の縦割り行政の価値基準では伝統的農地の価値は、農業、環境、教育、公園、文化いずれにしても、行政として引き取るには一步及ばないものがあります。各縦割りの中でも伝統的農業の価値を上げようという動きはありますが、残念ながら今の各行政の基準はそこまで達してはしません。しかし、総合的には伝統的谷津田はすごい価値があります。これをひきとってくれるような行政的な手立て、あるいは縦割りの中のひとつでもよいからひきとってくれば伝統的な谷津田・里やまの自然は守れるのではないかと思います。谷津田保全の戦略のひとつとしてはこのような実態を考慮していく必要があると思います。

今回のシンポジウムは行政と市民との関係を中心におこなわれました。しかし、この中に農家・農業の視点が重要であることが指摘されたと思います。今後の農家・農業の問題は、日本の行く末を決める大事なことであり、この問題は今の子どもや孫や将来の人々には大変な影響を与えるものだと思います。このことは、一步間違えると、日本もアフガニスタンと同じことになりかねません。日本が海外援助をしている状況がありますが、最近では、日本のODAが農業機械などを援助しても、現地の人には受け取らないと言った話も聞きました。「機械をもらっても、そのうち故障するし、ガソリンも必要だ。少ししたらすぐ使えなくなって、むしろじゃまになるから、日本に持って帰ってくれ」というのです。経済原理に毒された日本人の、自然と生きる現場に対する安易な考えが迷惑がられている状況なのです。市民・行政が農家・農業の現場を真剣に考えて行かなければならないと思います。

先日、あるシンポジウムに出席したとき、市民の方から、「谷津田・里やまを守るなかで都市開発を進める行政となかなか話がかみ合わなくてどうしようもない、どうしたら良いだろうか」と言った質問を受けたことがありました。そんなときは、私は、みんなで騒ぎ、あばれることも重要だ。また、それでもどうしようもなければ行政のトップをみんなで代えるしかないとも言いました。実は、そのとき、その後県知事になられた堂本さんもたまたまその会場にいられていたのですが、私は、どんなトップの人でも、現場状況を知り、現場の人の苦勞に耳を傾ける必要があると述べました。

自然保護の現場を考える時、市民、行政、農家・農業、それともう一つキーワードがあると思います。それは研究者です。私も研究者の一人ですが、先ほど、農学と農業との隔たりの問題が指摘されました。私も、学生の頃、林学に所属していたときに、先輩が、「林学栄えて、林業滅ぶ」と言っていたことを今も強く記憶に残っています。農学また生態学の研究のプロはそれぞれ何百、あるいは何千人もいるかも知れません。このプロの研究者は、社会の現場に役立つ情報発信をしっかりとしていく必要があると思いますし、みなさんが研究者にそれを求めることも重要です。

各地で自然保護と開発のぶつかり合いがありますが、まともに開発と戦って自然保護は勝てるわけではないとも思います。その戦いは、戦車と水鉄砲の戦いに等しいと思うのです。開発を進めるのは、全てプロの人たちです。日本には何万人、いや何十万人の開発のプロがいます。それに対し、自然保護をプロとしている人は、日本中でどれくらいの人がいるのでしょうか。それでも日本の将来を考えると開発のプロ集団に勝たねばならない戦いがたくさんあります。うまく正しく戦えば、たとえ水鉄砲でも、戦車を止めることはできると思います。シンポジウムのあとで堂本さんと会ったとき、自然保護のプロをたくさんつくって下さいと話しましたが、知事になられたので是非期待したいと思います。

本日は、講演されたみなさん、また会場のみなさん長い間本当に有難う御座いました。これで、ちば・谷津田フォーラム第6回シンポジウム「谷津田再生、行政・市民の役割と課題」をお開きにさせていただきます。



## 2002年度 ちば・谷津田フォーラム活動実績一覧

活動名	実施年月日	活動場所
第27回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年4月7日	千葉市緑区下大和田
第27回幹事会	2002年4月24日	千葉県立中央博物館
第28回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」 & 田うえ	2002年5月11日	千葉市緑区下大和田
第28回幹事会	2002年5月29日	千葉県立中央博物館
第29回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年6月2日	千葉市緑区下大和田
第29回幹事会	2002年6月25日	千葉県立中央博物館
第30回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年7月7日	千葉市緑区下大和田
第30回幹事会	2002年7月24日	千葉県立中央博物館
ちば・谷津田フォーラム会誌第7号発行	2002年7月25日	ちば環境情報センター事務所
第31回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年8月4日	千葉市緑区下大和田
第31回幹事会	2002年8月28日	千葉県立中央博物館
第32回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年9月1日	千葉市緑区下大和田
第32回幹事会	2002年9月26日	千葉県立中央博物館
第33回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年10月6日	千葉市緑区下大和田
第33回幹事会	2002年10月23日	千葉県立中央博物館
第34回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年11月3日	千葉市緑区下大和田
下大和田土地区画整理組合準備会との懇談会	2002年11月20日	下大和田土地区画整理組合準備会事務所
第34回幹事会	2002年11月27日	千葉県立中央博物館
第35回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2002年12月1日	千葉市緑区下大和田
第35回幹事会	2002年12月18日	千葉県立中央博物館
第36回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年1月5日	千葉市緑区下大和田
第36回幹事会	2003年1月7日	千葉県立中央博物館
第37回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年2月2日	千葉市緑区下大和田
第37回幹事会	2003年2月7日	千葉県立中央博物館
ちば・谷津田フォーラム 第7回シンポジウム「谷津田からの夢発信～循環型社会への提言～」(共催)	2003年2月9日	千葉県立中央博物館
第38回「下大和田谷津田の観察会とゴミ拾い」	2003年3月2日	千葉市緑区下大和田
第38回幹事会	2003年3月7日	千葉県立中央博物館

### <<< ちば・谷津田フォーラム定期観察会 - 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い - >>>

場 所：千葉市緑区下大和田 集 合：中野操車場または現地 10:00

開催日：毎月第1日曜日 10:00～12:00

交 通：中野操車場へは JR 千葉駅 10 番千葉フラワーバスで 45 分 (520 円), 車の場合は東金有料道路を中野料金所で降りて東金街道に入り、東金に向かって 1.5 km ほどで右側にラーメンショップの看板がみえてくる。道路をはさんで反対側がバス停。駐車場あり (会員の林理氏提供)

持ち物：弁当, 水筒, 敷物, 長靴など 参加費：300 円 (保険代, 資料代)

主 催：ちば・谷津田フォーラム 連絡先：ちば環境情報センター TEL&FAX 043-223-7807



がんばる茂原農業の生徒

千葉日報 2002年4月5日

ゲンジボタルやトウキョウサンショウウオの「隠れ家」に  
手作りピオ・バスケット



**保護狙い 谷津田の生物**

保護狙い 谷津田の生物  
保護狙い 谷津田の生物

独立児童会  
土本郷生徒ら

千葉日報 2002年5月21日

荒れ放題の谷津田再生



井の川公園  
大草町  
若葉区  
千葉市

池、湿地、水田に花畑  
住民手作り憩いの場

産廃阻止で町ぐるみの気運

産廃阻止で町ぐるみの気運

産廃阻止で町ぐるみの気運

産廃阻止で町ぐるみの気運

谷津田荒廃阻止への試み

茂原農生徒の大切な発見

社説

谷津田荒廃阻止への試み

谷津田の荒廃は、自然環境の破壊だけでなく、地域住民の生活にも大きな影響を及ぼしている。谷津田の再生は、自然環境の回復と地域住民の生活の向上を同時に実現することを目指す必要がある。

茂原農生徒の大切な発見

谷津田の再生は、自然環境の回復と地域住民の生活の向上を同時に実現することを目指す必要がある。谷津田の再生は、自然環境の回復と地域住民の生活の向上を同時に実現することを目指す必要がある。



毎日新聞 2002年7月11日

谷津田の再生

千葉市「いきものの里整備構想」まとまる  
若葉区・大草町モデル地区に  
伝統の遊びや文化を継承



谷津田の再生

谷津田の再生

谷津田の再生



豊かな生態系が残る谷津田(千葉市若葉区)



# 「谷津田」守ろう

## トンボやメダカ育つ豊かな生態系

首都圏に広がる低地を利用した水田が、谷津田の機能が衰微している。自然の地形や伏流水を生かした谷津田は、カエルやトンボ、メダカが多く、生物がすみやかな生態系が保たれている。ただ、近年は排水が盛んに行われ、谷津田の機能を失っている。これを防ぐため、千葉市では「谷津田」を「水田」から「谷津田」へと再定義し、自然の地形を活かした水田を「谷津田」として認定する。また、谷津田の機能を回復させるための取り組みも進められている。

## 千葉市が整備構想 市民らも取り組み

谷津田は、自然の地形を活かした水田で、豊かな生態系を育んでいる。千葉市では、谷津田の機能を回復させるための整備構想を打ち出している。また、市民らも取り組み、谷津田の機能を回復させるための活動を行っている。谷津田の機能を回復させるためには、自然の地形を活かした水田を「谷津田」として認定し、その機能を回復させるための取り組みを進める必要がある。また、市民らも取り組み、谷津田の機能を回復させるための活動を行っている。



中村俊彦さんが語る

田んぼのヒーロー

谷津田は、自然の地形を活かした水田で、豊かな生態系を育んでいる。中村俊彦さんは、谷津田の機能を回復させるための取り組みを進めている。谷津田の機能を回復させるためには、自然の地形を活かした水田を「谷津田」として認定し、その機能を回復させるための取り組みを進める必要がある。また、市民らも取り組み、谷津田の機能を回復させるための活動を行っている。



田んぼを守るには、谷津田フォーラムの人たち(千葉市下大井田町)

谷津田の機能を回復させるためには、自然の地形を活かした水田を「谷津田」として認定し、その機能を回復させるための取り組みを進める必要がある。また、市民らも取り組み、谷津田の機能を回復させるための活動を行っている。谷津田の機能を回復させるためには、自然の地形を活かした水田を「谷津田」として認定し、その機能を回復させるための取り組みを進める必要がある。また、市民らも取り組み、谷津田の機能を回復させるための活動を行っている。

千葉日報 2003年6月13日

地域新聞千葉東版 2003年1月24日

## 谷津田で古代米の餅つき

谷津田で古代米の餅つきが行われた。餅つきは、古くから行われてきた伝統行事で、地域コミュニティの絆を深める機会となっている。谷津田の豊かな生態系を背景に、餅つきを通じて地域の活性化を図りたいという思いが込められている。餅つきは、古くから行われてきた伝統行事で、地域コミュニティの絆を深める機会となっている。谷津田の豊かな生態系を背景に、餅つきを通じて地域の活性化を図りたいという思いが込められている。



# 大山千枚田など選定

### 文化的景観 保護・保存 全国から180カ所

文化庁が文化的景観保護・保存重要地域として、千葉市の谷津田と大山千枚田を選定した。

文化庁は、全国的に優れた文化的景観を保護・保存するために、全国から180カ所を選定した。その中で、千葉市の谷津田と大山千枚田が選定された。谷津田は、自然の地形を活かした水田で、豊かな生態系を育んでいる。大山千枚田は、古くから行われてきた伝統行事の場となっている。文化庁は、これらの文化的景観を保護・保存するために、さまざまな取り組みを進めている。

## <事務局より>

ご寄付くださった方々

会誌7号発行以降、次の方々から合計金額 66,780 円のご寄付をいただきました。紙面を借りてご報告いたしますとともに厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。(2003.6.15 現在、順不同・敬称略)

外川 仁, 阿河真人, 飯田三美, 小倉正一, 遠藤陽子, 川井洋基, 都留純秀, 中村久美子, 根本正之, 原 慶太郎, 村田威夫, 山下慶治, 石原京子, 八木 滋, 植田健仁, 川崎利男, 高山斉一郎, 柳沢朝江, 里見章子, 細矢忠資, 角川 浩, 宮下和喜

### 【ご寄付のお願い】

ちば・谷津田フォーラムの運営費は、会員の皆様の寄付と助成金でまかなわれています。会報発行だけでも郵送費を含めて1回約10万円の費用がかかりますが、今予算的に大変苦しい状況です。会の運営のため、今後とも引き続きご寄付いただきたくお願い申し上げます。

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム

顧問(敬称略・50音順)

石川 清(社会貢献活動企業推進協議会代表)

岩瀬 徹(千葉県生物学会副会長・千葉県立中央博物館友の会会長)

大沢雅彦(東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

楠岡 巖(四街道ユネスコ協会会長・四街道ライオンズクラブチャーターメンバー)

ケビン・ショート(東京情報大学教授、博物学・自然史ライター)

椎名益男(ライオンズクラブ国際協会(千葉県)環境保全委員長)

高橋在久(東京湾学会理事長)

中嶋弘子(千葉県生活協同組合連合会顧問)

根本正之(東京農業大学地域環境科学部教授)

組織・運営

・代表：中村俊彦(千葉県立中央博物館)

・副代表：岩田好宏(千葉県自然保護連合副代表), 原慶太郎(東京情報大学教授)

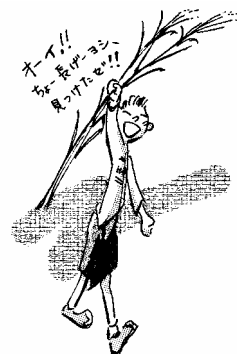
・事務局長：川本幸立

・会計：小西由希子

・編集：田中正彦, 小西由希子, 松下優子

・幹事：調査研究・教育普及(田中正彦, 栗原裕治, 小川かほる, 小西由希子, 網代春男, 高山邦明, 中村彰宏)

保全活動(大槻憲昭, 中野雅藏, 高山斉一郎)



## <編集委員より>

ちば・谷津田フォーラム会誌の名称を「谷津田の自然誌」とすることになりました。表紙の題字はワークホーム里山の仲間たちの倉島貴浩さんをお願いしました。これからも千葉県の谷津田・里やま保全と環境情報の収集・発信に役立つ会誌にしていきたいと思っておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。

ちば・谷津田フォーラム会誌「谷津田の自然誌」第8号

発行日：2003年6月30日

発行：ちば・谷津田フォーラム 〒260-0013 千葉県千葉市中央区 3-13-17 ちば環境情報センター内  
TEL&FAX 043-223-7807 代表 中村 俊彦

編集責任者：田中 正彦, 小西 由希子 イラスト：松下 優子

郵便振り込み口座番号：00120-0-187874 ちば・谷津田フォーラム